錢穆の陽明学について

饒　　佳　栄

Historical Survey of Qian Mu's Yangming Learning

RAO Jiarong

Abstract:

Qian Mu went through a substantial intellectual transformation from Yangming Learning to Zhu Xi Learning during his lifetime. This article comprehensively examines his discourse on Yangming Learning, dividing it into four distinct periods. In his youth, he held Yangming Learning in high regard as an ideal for the social reformation. He established a conceptual framework that prioritized Neo-Confucianism（理学）over Han Learning（漢学）, and Yangming Learning over Zhu Xi Learning. During the transitional period (the second Sino-Japanese War era), he began to question Yangming Learning and explore Zhu Xi Learning. During his wandering period（primarily in the early 1950s）, he was torn between his personal career aspirations（represented by Wang Yangming）and his academic pursuits（represented by Zhu Xi）. Serving as the president of New Asia College in Hong Kong at that time, the spirit of Yangming Learning proved instrumental in helping him overcome many challenges. Despite this, he remained hesitant to make a definitive choice. However, in his later years（from 1960s onward）, he devoted himself to Zhu Xi Learning and highly revered Zhu Xi's teachings, concurrently delivering harsh criticisms of Yangming Learning and ultimately rejecting it.

This article argues that Qian Mu's exploration of Yangming Learning is not entirely an academic endeavor but rather a Confucian practice intertwined with his own life-long pursuits and emotions. His stance on Yangming Learning was profoundly influenced by the zeitgeist, social environment, and his own situation. Furthermore, his comprehension of Yangming Learning both influenced and was influenced by the research on the history of the Chinese thought. On the one hand, the stance of Neo-Confucianism and the perspective of Yangming Learning influenced his evaluation of Han Learning in the Qing dynasty. On the other hand, the theory of the Zhedong Scholarship（浙東学術）by the Qing scholar Zhang Xuecheng used to serve as scholarly support for him in drawing on the Wang Yangming's thought. However, as he shifted toward Zhu Xi Learning, the intellectual chain connecting Wang Yangming, Huang Zongxi, and Zhang Xuecheng gradually disconnected.

Keywords: Yangming Learning, Zhu Xi Learning, Neo-Confucianism, Han Learning, intellectual history

キーワード：陽明学　朱子学　理学　漢学　思想史

はじめに

錢穆（1895～1990）は近代中国における理学（新儒学）[1] 的な気風を持つ歴史学者である。学界では、その『朱子新学案』を読んでいない人でも、錢氏が晩年に朱子を敬仰していたことは一般的に知られている。しかし、近代中国史の専門家でさえ、錢穆と陽明学との結びつきにあまり意識を払っていない。実際、若き錢穆は王陽明に深い感銘を受けていたのであり、その情熱は晩年の朱子への尊敬とおそらく同様であったろう。

では、陽明学は錢穆の学術研究にいったいどのような影響を与え、その人生にどのような価値と意義を持ってきたのだろうか。この問いは錢穆という人物とその学問を理解する上で極めて重要であり、また近代中国の学術思想の変遷を深く把握するのにも役立つであろう。錢穆の陽明学について詳細に整理し、検討する必要があると思われるのである。

1　先行研究

これまで、錢穆に関する論文や著作はかなり存在するが、ほとんどは歴史学の業績に焦点を当てたものである[2]。錢氏の理学研究には一部の関心が寄せられているが、大半は朱子学の研究に重点が置かれ[3]、陽明学に関する探究は限られている。

まず、汪学群の『錢穆学術思想评传』の一節と、郭斉勇と汪学群の共著『錢穆評伝』の一節[4]（汪氏主筆）は、内容的にはほぼ同じで、主に『陽明学述要』を紹介し、錢氏の陽明学を総合的に整理することはせず、深い分析はほとんど行われていない。また、呉展良の論文[5] では、錢穆の理学の実践と体験を重視し、人柄と学問に対する理学の指導的意義を強調しているが、陽明学にはあまり触れていない。さらに、頼柯助の論文[6] では、主に哲学的な観点から、陽明の「良知」と「天理」の意義および関係性についての錢穆の解釈を探究している。また、概念の明確化に重点を置き、牟宗三や唐君毅の解釈を参考にしつつ錢穆の見解について論じている。

1）日本の学界では通常、「理学」は「新儒学」（あるいは「道学」）と表記されているようである。しかし、錢穆の著作では「理学」と「新儒学」の両方の表現が使用されており、彼自身が「新儒学」に独自の意味を込めているため、混乱を避けるために本稿では錢穆の原文に従って一貫して「理学」と表記する。

2）錢婉約は研究レビューを発表しているが、そこでは多くの重要な論文が欠落しており、特に錢穆に対して批判的な（あるいはあまり高く評価しなかった）学者の論文はまったく言及されていないようである。杜正勝、傅傑、任剣濤らの論文がその例である。これはおそらく著者が錢穆の孫娘であるためかもしれないが、学術的な立場からは、結果的に残念なことである。錢婉約（2022：65-79）、杜正勝（1995：70-81）、傅傑（2016：1-110）、任剣濤（2019：147-196）を参照。

3）たとえば、楽愛国（2013：33-39）、陳勇（2015：1-9）、呉啓超（2021：86-102）、盧傑雄（2021：103-111）。

4）汪学群（1998：160-169）、郭斉勇・汪学群（1995：201-208）。

5）呉展良（2000：63-98）。

6）頼柯助（2021：58-71）。

管見の限り、歴史学の視点から銭穆の陽明学に関する論考はわずか三点しか存在しないようである。すなわち、朱湘鈺の「銭穆先生思想中的陽明図像」[7]、石力波の「従“高明”到“粗疎”――銭穆的陽明学研究述評」[8]、そして許裕農の修論「銭穆先生理学思想之転変――由陽明転向朱子」[9] である。

しかし、これらの三つの論文はいずれも次の三つの重大な欠陥を抱えている。まず一つ目は、文献の利用における不備である。これらの先行研究は、銭穆の理学における転向に注意を払っているが、多くの史料を十分に重視せず、また分析も単純すぎるところがあり、その陽明学に対する態度について、青年期の賞賛から、戦争中の転換、1950年代の徘徊、晩年の批判に至るまで、全体像を示すには不足している。たとえば朱氏の論文では、大まかに1944年を境として、銭氏の陽明学に関する論述を前後の二つの時期に分けている。前期は『王守仁』（後に『陽明学述要』と改題）を代表とし、後期は『中国学術思想史論叢（七）』を代表としている。ただ、この論文では主に『陽明学述要』及び『論叢（七）』の中の1940年代の論考を利用し、銭穆の他の陽明学に関する論著をあまり重視していない。同様に、許氏の修論では主に『王守仁』と『陽明学述要』のテキストの相違点を比較し、王龍谿と羅念庵について論じているが、1940年代半ば以降の銭穆の陽明学についてほとんど触れていない。また、石力波の論文も同じような不備が見られる。

二つ目は、視野の狭さである。これらの論文では、銭穆が生きた時代の思想環境に対する適切な注意が欠けており、銭氏自身の学術思想史研究に対しても、全体的なアプローチが不足している。そのため、銭穆にとっての陽明学の学術的価値と思想的意義が十分明らかになっていない。たとえば、なぜ若き日の銭穆にとって陽明学が非常に魅力的だったのか、その陽明学と学術思想史研究の間にはどのような相互影響があるのか、といった問題はあまり触れられていないのである。

三つ目は、学術的批判の精神が不足していることである。研究者たちは銭穆の高名さに圧倒され、銭氏をしばしば尊敬ないし崇拝の対象としているため、批判的検討が欠けている。たとえば、朱氏は銭穆の生涯にわたる陽明学の論述において、晩年の王陽明批判は初期の成果よりも鮮明で適切であると結論づけている[10]。同様に、石氏も、銭穆の晩年期における陽明学理解が、前期に比べて「より合理的で、より洗練され、視野がより広がっている」[11] と述べている。これらは実際とかけ離れた、信じがたい主張である。また、許氏の修論では、基本的に銭穆の言葉を引用して銭穆の見解を解釈し、それに対する疑問や批判はほとんど行われず、あたかも銭氏の言うことはすべて正しく無謬であるかのようである。

本稿では銭穆の生涯をかけた陽明学に関する論述を四つの時期に分けて考察したい。まず、初期、すなわち1920年代から1937年頃にかけて、その業績は主に『王守仁』と『国学概論』である。陽明学の立場から清代学術史研究を行うなど、この時期、銭穆は王陽明を極度に推賞していた。第二期は転換期であり、日中戦争の間、銭穆は陽明学に関する一連の論文を発表する。この時期、その思考は次第に程朱に傾き、王陽明への疑問や批判を呈するようになった。第三期はおおむね1950年代で、理学の入門書的

7）朱湘鈺（2006：111-137）。この論文をご恵贈いただいた台湾中興大学の遊逸飛氏に感謝したい。
8）石力波（2014：130-135）。
9）許裕農（2013：1-168）。
10）朱湘鈺（2006：135）。
11）石力波（2014：133）。

著作を数冊著した。また、徐復観との往復書簡から、その内面で陽明と朱子の間で揺れ動いていたことがわかる。第四期は1960年代以降で、朱子学の研究に力を注いで『朱子新学案』を執筆するのに対して、陽明学にますます不満を持つようになっていくのである。

2　清末民国の思想環境

本論に入る前に、銭穆がなぜ陽明学に惹かれたのかについて検討しておく必要がある。紙幅の関係で、詳しく論じることはできないが、当時の社会環境や思想的背景を理解することは、銭穆の陽明学を把握するのに役立つだろう。

近代日本と近代中国では、それぞれ「陽明学ブーム」が起きていた[12)]。その本質は同じではないが、一種の文化現象として注目に値する。近代中国における陽明学について、研究形態を六つの研究パラダイムにまとめた学者もいるが[13)]、その分析が適切かどうかは別として、王陽明が近代中国の知識人から極めて高く評価されていたことは明らかである。救国と啓蒙は知識人たちの歴史的使命であったが、偶然にも王陽明は清末から民国時代にかけてほぼ「立功・立徳・立言（功を立て、徳を立て、言を立てた）」聖人とされ、特にその功業は国力が衰退する時代において人々の共感を呼んでいた[14)]。さらに、陽明学が日本の明治維新に貢献したという説も一時的に流行し、それが憂慮する近代中国の知識人たちに大きな刺激と励ましを与えたのである。

戴季陶（1891～1949）の当時の観察に基づき、王汎森は、五四新文化運動以後、「客観的で理性的」な傾向と「主観的で意志的」な傾向という二つの傾向が浸透したことを強調している。この両者は互いに交錯し、競い合うことによって、1920年代から1930年代にかけて中国で何度か深刻な論戦を引き起こしたという[15)]。王陽明が「心即理」を唱え、「知行合一」を主張したため、陽明学はしばしば「陽明心学」とも呼ばれている。陽明心学は明らかに「主観的で意志的」な時代の潮流に同調しており、したがって、近代中国における陽明学が隆盛した理由は理解しやすいといえる[16)]。

国家の没落と民族の滅亡という危機が日に日に高まってきた頃、特定の歴史的資源が繰り返し活用され、歴史の記憶が繰り返し語られていた[17)]。秦燕春が指摘したように、清末から民国時期にかけて、晩明時代の歴史に対する探究が非常に盛んであった[18)]。その中で、黄宗羲の再解釈（「中国のルソー」と呼ばれていた）がとりわけ注目に値する。たとえば、思想的旋風を巻き起こした梁啓超（1873～1929）[19)] や、

12）呉震（2018：14-30）参照。近代日本の陽明学については、小島毅（2006）や荻生茂博（2008）を参照。

13）魏義霞（2021：7-18）。

14）銭穆（1998-51：457）参照。本稿に引用する銭穆の文章は以下、特に断らない限り、すべて『錢賓四先生全集』（台北：聯経出版事業公司、1998年）による。

15）王汎森（2020：327-348）。

16）民国時代における陽明学関連研究については古文英（2019：76-80）でうかがえる。

17）たとえば、章太炎は自分が清初の歴史に関する『東華録』を読んだことに何度も言及していた。王風は章氏のこの事例に対して見事な解析を行っている。王風（2015：12-53）参照。また、王汎森も章太炎における歴史記憶について検討している。王汎森（2001：71-87）参照。

18）秦燕春（2008）参照。

19）梁啓超と陽明学との関係については、張灝（著）崔志海・葛夫平（訳）（1995：194-205）、黄克武（2004：18-23）や

『仁学』で知られる譚嗣同（1865～1898）らは、みな黄宗羲に傾倒していた。

梁啓超は1902年３月から、横浜で創刊した『新民叢報』に「論中国学術思想変遷之大勢」を連載していた。この著述は胡適（1891～1962）や銭穆らに大きな知的刺激を及ぼした。梁氏はここで、黄宗羲を次のように称賛している。

> 開拓万古、推到一時者、梨洲哉、梨洲哉！『明儒学案』六十二巻、為一代儒林薮、尚矣；非徒講学之圭臬、抑亦史界一新紀元也、学之有史、自梨洲始也。『明夷待訪録』之「原君」「原臣」諸篇、幾奪盧梭『民約』之席；「原法」以下諸篇、亦厘然有法治之精神。（中略）梨洲誠魁儒哉[20]！

当時、黄宗羲を褒め称える文章は数え切れないほど存在していた。ここに引用した梁啓超の言葉から、民国時代の思想界における黄宗羲の地位がいかに高かったか想像するに余りある。そのような状況のもとで、若い銭穆が梁啓超の魅力的な文章に出会い、『明儒学案』を熟読するのは自然なことであったろう。『明儒学案』は陽明学を賞賛することを大きな目的とし、後世の学術思想史に深く影響した。こうした時代背景のもとで、銭穆が陽明学の世界に入り込み、その独特な魅力に惹かれたことは不思議ではない。

一　青年期：陽明学礼賛

1　『王守仁』

王守仁（1472～1529）、字は伯安、号は陽明、明代を代表する思想家である。王陽明は文学や軍事の分野でかなりの成果を上げたが、最も有名なのは「陽明学」（王学または良知学とも呼ばれる）をうち立てたことである。多くの人々が陽明に師事し、その学派は「姚江学派」として知られている。また、陽明学と朱子学は、宋明理学の二つの高峰といわれる。

1977年、当時八十三歳の銭穆は、『中国学術思想史論叢（七）』の序文で次のように記した。

> 余治宋明理学、首読『近思録』及『伝習録』、於後書尤愛好。及読黄・全両『学案』、亦更好黄氏。因此於理学各家中、乃偏嗜陽明。民国十九年春、特為商務印書館万有文庫編撰『王守仁』一冊、此為余於理学妄有撰述之第一書[21]。

この一節について、少し解説しておこう。いわゆる「黄・全両『学案』」とは、明末清初の黄宗羲（1610～1695、字は太沖、号は南雷、別号は梨洲老人）が著した『明儒学案』と、黄宗羲が草創し、全祖望らが続修した『宋元学案』のことである。また、この回想からもわかるように、銭穆は若い頃から『伝習録』や『明儒学案』を愛読し、強い影響を受けていた。そして、商務印書館からの依頼を受け、初めて理学

呉義雄（2004：62-69）を参照。

20）梁啓超（2001：107）。

21）銭穆（1998-21：序３）。

に関する書物『王守仁』を執筆し、1930年10月に刊行した。二十余年後、銭穆は若干の修正を行い、『陽明学述要』と改題してこれを再版した[22)]。

『王守仁』の陽明学理解について着目すべき点は三つある。まず、長い歴史の流れの中で捉えることである。銭穆はいう、

> 宋明六百年理学、大体説来、宋代是創始、而明代則是結束。王守仁尤是明代学者里的重鎮。到他手里、理学才達頂点、以後便漸漸地衰落了[23)]。

次に、陽明学を理学の最高峰と位置づけることである。銭穆によれば、宋の儒者たちは理学、とりわけ存在論と修養論においてかなりの成果をあげ、おおむね共通の見解に達したが、いずれも未解決の難問が残っていた[24)]。しかし、王陽明はこれらの難問を巧妙かつ見事に解決し、その結果、王学は二程や朱陸といった宋の大儒を凌駕したという[25)]。

さらに、陽明の晩年の思想を重視することである。そのため、主に「抜本塞源論」「大学問」、そして「天泉橋四句教」を活用している。まず「抜本塞源論」に対しては、「理想的かつ具体的であり、将来の人類社会が永遠に追求すべき遠景として扱うべきである」と、非常に高い評価を与えている[26)]。また、「大学問」については、王陽明が常に「大学」の教えを尊重し、朱子を尊敬していたこと、そして「格物致知誠意正心」の伝統を踏襲していることを述べつつ、古典を解釈する際に章句訓詁の方法を避けるべきだと強調している[27)]。さらに、物議を醸した「四句教」に対しては、銭穆は晩年のように強く批判せず、むしろ王陽明の「誠意」を十分に理解し、共感を持って解釈している[28)]。

ここで特筆すべきは、「大学問」と「天泉橋答問」は論争を引き起こしやすく、誤った方向へ進む可能性があるため、今後の陽明学の発展においては、「抜本塞源論」に特に重点を置き、陽明学の本義を貫くことが重要だと考えていることである[29)]。さらに、以下のように提案している。

> 此後講王学的、能把浙東和顔・李（顔元、李塨——引用者）及戴・焦（戴震、焦循——引用者）三派、融和会合；再帰之浙中・江右・泰州（陽明後学の三派——引用者）、万派帰宗、而溯源于陽明；一炉共冶、海涵地負、再従博雑見精純、再従艱深得平易、庶乎重発陽明良知精義、為宇宙開奇秘、

22）『陽明学述要』と『王守仁』は出版された時期が二十年以上離れているが、両者の枠組みや内容はほぼ同じである。そのため、本稿では『王守仁』の代わりに『陽明学述要』の文言を引用しているが、そのことが文献の適切さに影響を及ぼすわけではない。この点については、朱湘鈺はすでに指摘している。

23）銭穆（1998-10：1）。

24）銭穆（1998-10：1-2）。

25）銭穆（1998-10：61、66、75、78-79）。

26）銭穆（1998-10：89）。

27）銭穆（1998-10：98-100）。

28）銭穆（1998-10：110-114）。

29）銭穆（1998-10：116）。

為斯民立標極、那便是命世的豪傑[30]。

ここにいう「為宇宙開奇秘、為斯民立標極（宇宙のために奇秘を開き、斯民のために標極を立つ）」という言葉は、北宋の張横渠の名言「為天地立心…為万世開太平（天地のために心を立て…万世のために太平を開く）」[31] に似ている。ここには若き銭穆の抱負および王陽明を尊敬する姿がよく表現されている。

以上、『王守仁』の要点を簡単に整理した。次に、『国学概論』における陽明学の論述について検討したい。

2　『国学概論』[32]

1931年５月出版の『国学概論』の宋明理学部分では、約六百年にわたる理学の歴史が簡潔な文体でまとめられ、整然とした構成となっている。この書では、宋明理学が四つの転換を経験し、その各転換期には二程、朱子、陽明、蕺山（劉宗周）が代表的人物であるとする[33]。

このように宋明理学の歴史には四度の転換があるものの、銭穆が最も重要視していたのは依然として王学である。王陽明を宋明時代の諸儒と比較し、それによって陽明学の優れた点を次のように説明している。

夫「以天地万物為一体」者、此北宋以来理学家精神命脈之所寄也。（中略）及陽明出、単提「致良知」一語、従行事着眼、而後「吾心」之与「外物」、「居敬」之与「窮理」、皆可以溝貫而無閡。蓋明道・象山偏於内、其失也涵養持守而無進学、不免於空疎。伊川・晦庵偏於外、其失也記誦博覧而無湊泊、不免於支離。惟陽明即本吾心之真誠発露、而一見之於行事、即知即行、相尋而長、乃可以超乎居敬窮理之上、而収心物兼済、内外交尽之功也。故言宋明理学者、濂溪・横渠究極宇宙万物本原一派、終不免為断港絶潢。雖朱子「格物補伝」之説、汪洋恣肆、彙為大観、亦復非朝宗所極。而明道「識仁」之意、至姚江出而言「致良知」、乃然後心物兼賅、体用一源、為可以無遺憾也。故理学之有姚江、如百川之赴海、所謂不達而不止者也[34]。

ここには、宋明理学に対する銭穆の全体的な評価が鮮やかに示されている。程顥（明道）や陸九淵（象山）は内向きに傾いていて空疎に陥っているのに対し、程頤（伊川）や朱熹（晦庵）は外向きに傾き、まとまりのない思考を示しているとされる。しかし、王陽明の良知説のみが「心と物を兼ね備え、体と用が一つの源から出て」、新たな理学の地平を切り拓いたと称えている。

30）銭穆（1998-10：129）。

31）島田虔次（1967：1）。

32）『国学概論』は1928年に執筆が終了し、1931年５月に出版された。一方で、『王守仁』は1930年春に脱稿し、同年10月に出版された。そのため、『国学概論』は『王守仁』と比較して、執筆は先行しており、出版は後となった。しかし、両書はほぼ同じ時期の産物と見なすことができる。

33）銭穆（1998-1：235、253、261、277）。

34）銭穆（1998-1：268-271）。

なお、『王守仁』と『国学概論』は宋明理学に対する認識において、その枠組みから具体的な視点まで、基本的に『明儒学案』を援用している。これにより、文章の中に王陽明への崇敬が溢れる結果ともなった。

3 『中国近三百年学術史』

1931年秋、初めて北京大学で教鞭を執った銭穆が担当した授業の一つは「中国近三百年学術史」であったが、そのアプローチは1929年に亡くなった梁啓超の同名の著作とは異なっていた。梁啓超や胡適は「理学の反動」または「反理学」の視点から清代の学術を位置づけていたが、銭穆は理学の立場から清代の学術の変遷を考察した。この講義は後に整理され、商務印書館から1937年に『中国近三百年学術史』（以下『学術史』と略称）として刊行された。

銭穆の『学術史』における特色の一つは、全体を通じて陽明学の精神が鮮明に現れ、漢学よりも理学を優先していることにあると考えられる。興味深いのは、この著作の中で王陽明と黄宗羲、章学誠（1738～1801、字は実斎）の三人を「陽明学圏」に組み入れていることである[35]。

なぜ章学誠が陽明学の系譜に入ったのか、それは近代日本と中国の学術的な動向とも関係がある。当時、内藤湖南（1866～1934）や胡適、梁啓超など著名な学者たちの賞賛によって、章学誠は広く知られるようになっていた。銭穆は小学校の教師だった頃、章学誠の代表作『文史通義』が北京大学の入学要項に必読書として挙げられていることが知ってから、章氏の学問を懸命に探究してきた[36]。章学誠の「浙東学術」という概念に示唆を受け、王陽明・黄宗羲・章学誠をまるで「三位一体」のように結びつけたのである。『学術史』に次のようにある。

> 故余謂晩近世浙学、基址立於陽明、垣牆拡於梨洲、而成室則自実斎。合三人而觀、庶可以得其全也[37]。

このほか『王守仁』や『国学概論』と同様に、『学術史』も理学の歴史における王陽明の地位と貢献を高く評価している。

> 宋明理学、至於陽明良知之論、鞭辟近裏、已達極度[38]。

さらに、『学術史』では朱子学に対する批判が続き、朱熹の「格物」という考え方はそもそも不可能であり、実現できないとされている[39]。朱子学は抽象的かつ神秘的であり、「実学」である陽明学と比較して劣ると考えられているのである。

35）詳細は饒佳栄（2023a：23-37）で論じた。
36）銭穆（1998-51：84）。
37）銭穆（1998-16：36）。
38）銭穆（1998-16：11）。
39）銭穆（1998-16：58）。

ただし、清代の学術史における漢学と宋学の論争について、銭穆は明らかに宋学（宋明理学）側を支持している。『学術史』の「引論」に、

近世揭櫫漢学之名以与宋学敌、不知宋学、則無以平漢宋之是非[40]。

とある。これが『学術史』の基本的な趣旨といってよかろう。言い換えると、銭穆は宋学（とりわけ陽明学）の観点から清代の学術思想の変遷を検討しているのである。

本章の論述からわかるように、この時期において銭穆の思想的枠組みは次の通りであった。すなわち、漢学と宋学（理学）についていえば、漢学は宋学に及ばない。理学の内部についていえば、朱子学は陽明学に劣り、陽明学が最高の位置にある。つまり、銭穆はおよそ中年期まで陽明学を最高の理念として追求しており、それゆえに疑問や批判はほとんど見られない。また、銭穆の陽明学理解は、章学誠の「浙東学術」論の影響を受け、王陽明、黄宗羲、章学誠を結びつけることになった。その後、朱子学に転向するとともに、王－黄－章を結びつけたこの「陽明学圏」も次第に解体されていく。これは銭氏の陽明学解釈の一特色といえる。また、陽明学礼賛の立場も清代の漢学に対する評価に影響を与えていたが、以後、陽明学に対してほぼ無批判の状態が長く続くわけではない。

二　転換期：陽明学に対する疑問と批判

1　王龍谿・羅念庵

1937年７月、日中戦争が勃発した後、国立北京大学、国立清華大学、そして私立南開大学は連合して臨時大学を構成し、長沙に南下した[41]。その際、文学部は南岳・衡山に設置された。その後、銭穆も南下し、南岳で宋と明の諸家の文集を読み、王龍谿や羅念庵の著作を読んだ後、「羅念庵年譜」と「王龍谿略歴及語要」の二つの論文を書いた[42]。このことから銭穆は「王学の長短について新たな理解を得た」（于王学得失特有啓悟）。「これが私の理学の研究において程朱への転向の始まりとなった」という[43]。

「新たな理解」という言葉は、より明確にいえば、銭穆が王陽明に対する姿勢に或る変化が生じたことを物語っている。それ以前の礼賛から、疑問や批判に転じていくのである。その疑問や批判は、陽明後学、つまり王龍谿や羅念庵の著作を読むことによって開始された。王龍谿と羅念庵は明代中後期における陽明学派の重要な人物であった。龍谿（龍溪とも書く）は王畿（1498～1583）の号であり、念庵は羅洪先（1504～1564）の号である。

羅念庵と王龍谿に関する論考は1941年に発表された。約十年前に出版した『王守仁』の最終章では、

40）銭穆（1998-16：1）。

41）John Israel（1999：7-29）。

42）それぞれ『責善半月刊』1941年４月、10月に掲載し、後に『中国学術思想史論叢（七）』に収められる。

43）銭穆（1998-51：216）。

王陽明の門弟たちの状況を紹介しており、偶然にも王龍谿と羅念庵の両者を取り上げている。それらと上述した二つの論考を対比することで、その見解の変化をより明確に理解できるだろう。

『王守仁』において、羅念庵と王龍谿は学問的にも互いに異なる点があるが、二人は王陽明の衣鉢を継承しており、ただスタイルが異なるだけだと述べている。

だが、南岳での読書は、錢穆に大きな知的衝撃を与えた。「王龍谿略歴及語要」によると、王龍谿の主張の多くは禅宗の思想とほぼ一致するが、孔子や孟子の趣旨とはかなり異なるとされている[44]。また「羅念庵年譜」の目的は、羅念庵と陽明学派との思想上の相違点を強調することであった[45]。

興味深いことに、「羅念庵年譜」が発表されてから十数年後、錢穆はある論考で次のように明言している。

> 我向来読『明儒学案』、因先接受梨洲意見、比較総尊向江右、尤其是羅念庵。但在民国二十六年、避難居南岳、始獲読『念庵全集』、拿来与『龍谿集』細心対読、我才感到念庵存心在挽救陽明学後起之流弊、而到底非陽明学之真骨髄、真嫡血[46]。

これによって、「羅念庵年譜」の意味が明らかになる。錢穆は、『念庵全集』を読んだ後、羅念庵が陽明学の真の継承者ではなく、逆に宋の儒学を用いて陽明学の欠点を救おうとしていたと主張している。また、「王龍谿略歴及語要」では、龍谿が陽明学の宗旨に反し、陽明学自体にも問題があることを立証しようとしている。これらの二つの論文をあわせて見ると、陽明学、特に王陽明の晩年の思想には大きな欠陥があると考えていたことがわかる。こうして、錢穆は次第に陽明学から距離を置き、朱子学に傾倒するようになった。

2　陽明学に対する疑問と批判

1944年夏、錢穆は療養期間中に『朱子語類』と『指月録』を通読し、唐代の禅宗から宋明理学への発展について「やや深い認識を得た」と述べている[47]。ここで重要なのは、錢穆が初めて『朱子語類』を通読したことである。そして、「やや深い認識を得た」（獲有稍深之認識）という言葉から、『朱子語類』の読破がその陽明学評価に影響したことが推測される。

その後、次々に発表された王学に関する多くの論考の中で注目に値するのは以下の四篇である。「説良知四句教与三教合一」（『思想与時代』第37期、1944年11月）、「読陽明伝習録」（『民意日報』1947年２月４日）、「略論王学流変」（『思想与時代』第43期、1947年３月）、そして「陽明良知学述評」（『学原雑誌』第１巻第８期、1947年12月）。ここでは、これらの四つの論考を分析し、それに基づいて錢穆が初めて朱子学によって「洗礼」を受けた後に生じた陽明学に対する見解を探求しよう。

まず、「説良知四句教与三教合一」。この論文の文体は、錢穆の普段の文体とは大きく異なっている。

44）錢穆（1998-21：220）。

45）錢穆（1998-21：272）。

46）錢穆（1998-18：209）。

47）錢穆（1998-51：260-261）。

銭氏は生涯、学術的文章に細心の注意を払い[48]、文章は簡潔で明快、そして爽やかである。ただ、この論文は構成が不明瞭かつ冗長で、通常の水準を下回っているようである[49]。また、この論文では、陽明の晩年の四句教、特に「無善無悪心之体」を批判し、明末の「三教合一」説が陽明学に由来すると論じている。しかし、倉卒のうちにまとめられたためか、いくつかの箇所で無理があることが指摘できる。たとえば、同じ段落の中で、宋儒を二つの学派に分けた後、しばらくしてこれらの二つの学派に実際には相違点がないと主張している[50]。これは明らかに矛盾しているだろう。

次に、「読陽明伝習録」。この論文には留意すべき点が二つある。一つは、黄宗羲に対する疑問の提起である。以前にも疑問を抱いていたが、この論文ではより集中的に取り上げられている。たとえば、黄宗羲が「抑浙中、揚江右」（王門浙江派を批判し、江西派を称揚する）としたことは、まったく陽明学の伝承の真実を伝えていないという。さらに、黄宗羲はその師である劉宗周の教義を深く理解できていないと示唆している[51]。

もう一つの点は、銭穆の思考が未熟で、見解が前後に揺れていることである。一般的に『伝習録』の下巻は疑わしく、上巻の信頼性が高いとされているが、この論文では『伝習録』の三巻を一巻ずつ個別に研究するだけでなく、全体として考慮すべきだと強調している。しかし、同年末に発表した論文「陽明良知学述評」の中で、『伝習録』は上巻と中巻を主に参考にすべきだと主張している[52]。

続いて、「略論王学流変」。この論文は、王陽明の後継者（浙中王門、泰州学派、江右王門）を評価したものといってよい。文章自体は整然とし、流暢で読みやすく、まるで「说良知四句教与三教合一」の著者とは別人のようである。まず、浙中王門（浙江派）の代表的人物として、銭緒山や王龍谿が挙げられる。簡単にいえば、銭緒山が師の教えを守ることができたのに対し、王龍谿の「現成良知」論は禅宗と大きな違いがないという[53]。また、泰州学派の創始者である王心斎の思想は「大体只是狂、還不是禅（だいたいは狂であり、禅ではない）」[54] としている。銭穆によれば、王龍谿と王心齋の思想を継承した王東崖が泰州学派を禅宗へと導き、その影響が全国に広がったという[55]。さらに、羅念庵と聶双江を江右王門（江西派）の代表的人物として焦点を当てている。銭穆もまた、これらの二人（黄宗羲によって高く評価された）に肯定的な評価を与えず、二人とも正しい道をたどっていないと断言している[56]。

48）銭穆は弟子に論文の文体に注意するよう助言し、民国時代の学者たちの論文の優劣について評価した。銭穆が1960年５月28日に余英時に宛てた書簡。銭穆（1998-53：427-429）。この書簡は、余英時が最初に公表し、その著書『猶記風吹水上鱗：銭穆与現代中国学術』（台北：三民書局、1991年）、『銭穆与中国文化』（上海：上海遠東出版社、1994年）の付録としてかなりの反響を呼んだ。

49）晩年、銭穆は中年時代の執筆について反省し、いくつかの文章があまりにも軽率であったと正直に述べている。銭穆が1965年11月12日に楊聯陞に宛てた書簡による。銭穆（1998-53：239）。

50）銭穆（1998-21：188）。

51）銭穆（1998-21：121-124）。

52）銭穆（1998-21：123、112）。

53）銭穆（1998-21：201、206）。

54）銭穆（1998-21：210）。

55）銭穆（1998-21：210-211）。

56）銭穆（1998-21：212-215）。

そして、「陽明良知学述評」。タイトルの通り、この論考はこの時期の銭穆による陽明良知学の総評と見なすことができる。ここでは二つの点に留意したい。まず第一に、ほぼ半分の内容が『王守仁』で述べられた主旨と基本的に一致していることで、陽明の良知学が宋儒の問題を解決したとし、「知行合一」と「人人皆可堯舜」の理論を賞賛している。そして、陽明学は心と事が融合し、最終的に「天下一家、万物一体」の境地に達すると主張している[57]。第二に、良知学の疑問点を指摘していることである。たとえば、「良知即天理」は主に事理に偏っており、物理を充分に考慮していないようだとし、「万物一体」論は、時には空虚な存在論になる危険性があると指摘している。また、「岩中花木」の説は、極端な個人主義的唯心論になってしまう傾向があると見る。さらに、「無善無悪」の理論はあまりにも玄虚で、現実離れているとされる[58]。

そればかりか、銭穆は1948年の春に「成色与分両」というエッセイを執筆した。その中に、

> 陽明「良知学」、実在也只是一種「小学」、即小人之学。用今語釈之、是一種「平民大衆的普通学」。先教平民大衆都能做一個起碼聖人。従此再進一歩、晦翁的「格物窮理」之学、始是大学、即大人之学。用今語釈之、乃是社会上一種「領袖人才的専門学」[59]。

とある。この段落だけを読むと、銭穆が陽明学を捨て、完全に朱子学に移行したかのように見えるかもしれない。しかし、実際には、この段落の直後、朱子の「大学」と陽明の「小学」の両方を取り入れることが正しい道であると述べている。

本章の検討を総合すると、日中戦争の期間における銭穆の陽明学は次のようにまとめられる。戦争初期、陽明学の後継者の著作を読み、王学に対して疑念を生じた。戦争末期には、『朱子語類』を通覧することで陽明学に対する批判が深まった。しかし、その意見には矛盾や齟齬が少なくない[60]。この時期は、銭穆が陽明学から朱子学に移行し始めた時期と捉えられる。

三　徘徊期：陽明と朱子のはざまで

1　入門書の三種

1949年は現代中国の知識人にとって運命の分かれ道であり、銭穆にとっても同様であった。この年、銭穆は中国大陸を離れ、香港で新亜書院を創設した。この時期、書院の状況は厳しかった。生徒の募集は困難であり、運営の経費も不足していた。しかし、校長の銭穆は逆境を恐れず、全力を尽くしていた。これは陽明学の鼓舞と関連しているかもしれない。

57）銭穆（1998-21：92-93、99-101、102-103）。

58）銭穆（1998-21：94、105、106、110）。

59）銭穆（1998-39：42）。

60）それから十数年後、銭穆は陽明学に対する批評を振り返り、当初の評価があまりにも軽率だったと反省している。銭穆が1954年某月11日に徐復観に宛てた書簡による。銭穆（1998-53：333）。

1950年代を通じて、錢穆の陽明学に関する業績は、1955年に再版された『王守仁』（『陽明学述要』と改名）を除いて、主に三つの一般向け著作に表れている。すなわち、1952年に出版された『中国思想史』の王陽明部分、1953年に出版された『宋明理学概述』の王守仁部分、そして1956年に出版された『王陽明先生伝習録及大学問節本』である。

『陽明学述要』は台北で出版され、その契機は「総統蔣公が王学を提唱したこと」にあった[61]。日中戦争時期、蔣介石（1887～1975）に呼び出されたことをきっかけに、二人は連絡を取り合うようになった[62]。一方は政界の指導者、他方は高名な学者であったが、ともに宋明理学を尊重し、伝統文化を支持していたため、互いの距離が近づいていった。

蔣介石は大陸から台湾に退いた後も、理学を推称し、陽明思想を党と軍の統治に活用し続けていた。蔣氏の統治下の台湾では、陽明学が公式なイデオロギーの重要な要素となった。その反面、中国大陸では共産党が政権を掌握した後、宋明理学は反動、後進性、唯心論の代名詞とされた[63]。

こうして、錢穆は1950年代に陽明精神を広めるために著作を執筆した。これらの著作は国共の闘争と直接的な関係を持つわけではないが、この時代背景は錢氏の陽明学の論述を理解する上で有益だろう。たとえば、張其昀（当時は台湾で行政院教育部長を務めた）の要請により、錢穆が執筆した『中国思想史』と『宋明理学概述』は「現代国民基本知識叢書」に収録され、中華文化出版事業委員会から出版されている。

さらに、『王陽明先生伝習録及大学問節本』は、タイトルが示すように、『伝習録』と『大学問』から、初学者が理解しやすい要点を抜粋し、簡単な解説を加えたものである。こうしたスタイルであるため、陽明学を批判する言葉はほとんど含まれていない。

2　徐復観との往復

上記の著作に加えて、1950年代における錢穆の王陽明理解は、書簡の中により多く示されている。特に、徐復観との書簡の往復による議論がその典型である。

徐復観（1904～1982）は、若い頃に日本に留学し、帰国後は軍務に身を投じ、蔣介石に重用されていた。1949年に台湾に移り、そこから教育と学術研究に転身し、戦後の新儒学を代表する人物となった。

1950年代、徐復観と錢穆の関係は密接であった。錢穆の全集には、徐復観への書簡が31通（1951年から1957年まで）[64] 収録されているが、これは楊聯陞への書簡（40通、ほとんどは1960年代に書かれた）に次ぐものであり、高弟である余英時（28通）よりわずかに多い。この間、二人は何度も議論を交わし、その結果、錢穆は陽明学についての本音を多く吐露するようになった。

61）錢穆（1998-10：再版序５）。

62）錢穆と蔣介石の接触については錢穆の次の回想を参照。「屢蒙蔣公召見之回憶」、錢穆（1998-23：81-92）。

63）陳立勝（2018：50-52）。この論文では、近代中国における王陽明の評価について簡潔に整理している。

64）『錢穆致徐復観信札』（錢婉約整理、北京：中華書局、2020年）は、錢穆が徐復観に宛てた書簡106通を収録しており、その中で最も早いのは1948年に書かれた１通である。残りの105通の書簡は1951年から1957年までの間に書かれた。また、『素書楼餘渖』の目次には「致徐復観二十九通」と書かれているが、本文では「致徐復観三十一通」となっている。これは、本文の数が正確である。

たとえば1955年５月19日の書簡で、銭穆は次のように述べている。

惟弟自謂主要仍在服膺陽明。（中略）弟終対于宋儒「理」字有些認為不妥当[65]。

また、同年８月17日の書簡に、

平常講学喜愛陽明、而生活則内羨晦翁。若真照陽明精神、在事上磨練、不得不在学問上放棄、王学末流、便成空疎。弟沈浸于清儒経学中甚深、私心実慕晦翁之博聞。（中略）説到此、又覚得陽明語洵有力。弟決不是一辦事人、到後終須擺脱、惟目下則仍曲折以赴耳[66]。

とある。「学問」（朱子）と「仕事」（陽明）の間で、銭穆は葛藤を感じているようである。

さらに、同年９月16日の書簡では、自身の学問の宗旨について、次のような告白がある。

在義理方面、弟尊孟子与陽明；在学問方面（此学問指狭義言）、弟甚喜章実斎、因其治学途轍、与弟多不謀而合也。
実斎言「為学不可無宗主、不能有門戸」、此意弟甚賛成。弟宗主在孟子・陽明、然信陽明而知重朱子；尊孟子而又愛荘周。窃謂学問重在補偏救弊、此層実斎亦屢言之、而晦庵可以救王学之弊、荘子可以補孟子之偏、因此晩明王学流弊曝著、一輩学者即主由王返朱、而『中庸』『易伝』即採用荘老来補孔孟之偏[67]。

銭穆は自身の学問の指針として孟子と陽明を明確に示していたが、他方で朱子が「偏りを正し、欠点を補う」ことができるとも述べている。このことから、当時の銭穆は陽明と朱子の間で揺れ動き、最終的な決断を下していないように思われる。

このような複雑な心情は同年に発表された「心与性情与好悪」にもはっきりと反映している。この論考には次のような言葉がある。

就人文源頭説知行本体、則陸王之言為是；但就人類已走上文化社会後之日常実際説修習軌轍、則朱子之論為允[68]。

そして、次のようにまとめている。

65）銭穆（1998-53：335）。
66）銭穆（1998-53：346）。
67）銭穆（1998-53：353-354）。
68）銭穆（1998-18：204）。

今再綜合的説、程朱正為透悟了歴史心与文化心之深義、而始提出他們「性即理」之主張、此説雖若迂遠而平実。陸王雖簡易切近、而提出他們「心即理」的主張、但究不免于歴史心与文化心有忽略。但縦説歴史心与文化心、亦終不該抹殺了人類現前的「個体心」。這是我対此問題之最後見解[69]。

こうして、錢穆は、「歴史心」「文化心」（程朱）と現在の「個体心」（陸王）の間でバランスをとろうと努力していたが、暗に朱子の側に傾向しており、特に『朱子新学案』に取り組む際にその傾向が顕著になり、最終的にはこのバランスが崩れた。しかし、この時期には、錢穆はまだ朱子と陽明の両者のはさんで徘徊していたといってよかろう。

3　一人の陽明、二つのバージョン

『宋明理学概述』の王陽明部分は、このバランスの傾きをはっきりと表現している。便宜上、本章の結末では、この問題について少し考察しておきたい。

『宋明理学概述』の初版は1953年に出版されたが、条件の制約のため、ここでは1955年版を使用する。それから二十年以上経った1977年に再版され、その他の内容はほとんど変わっていないものの、王陽明部分には若干の変更が加えられた[70]。1977年の改訂版のあとがきには次のような説明がある。

自問対宋・明理学、又薄有所獲。惟此稿仍存往年之旧、不再追加。僅于明代王学一部分、取材雖未増減、案語闡釈略有改定。読者或保有旧刻、取此対読、可知余前後見解有不同[71]。

この説明をふまえて、1955年版（前者）と1977年版（後者）を比べると、王陽明の理解に重要な差異が存在することがわかる。

前者の王守仁部分における最後の一節は以下の通りである。

他這一番朱子晩年定論的裒集、却引起了当時乃及後代不少的争辯、成為此後学術界絶大一公案。但我們即此可想朱熹学術影響力之大。（中略）正因守仁立説、始終未能擺脱尽朱熹的牢籠。這一点却使他与九淵面貌迥異。九淵只管自伸己説、守仁則如朱熹般、要把上来伝統諸家、和会包羅。朱熹要把周邵張三家与二程会和、其事較易。守仁要把『大学』和朱熹意見和他的良知学会合、這却是件費力事。但亦因此而使他的学術規模、似較九淵更恢宏。所以朱陸対垘、一定要到守仁出来、才見得旗鼓相当了。自此以後、無論是王学、非王学、対良知学賛成或反対、一切論点便集中到他身上。也正如

69）錢穆（1998-18：213）。

70）『宋明理学概述』は中華文化出版事業委員会によって1953年に初版が出版され、1955年に再版された。1977年に学生書局によって再編集され、王学の部分にわずかな修正が加えられ、1984年に誤字が訂正されて再版された。『錢賓四先生全集』の中の本書は学生書局1984版を基にして出版された。『宋明理学概述』の1955年版のスキャンに協力してくれた京都大学博士生の徐新源氏に感謝の意を表したい。

71）錢穆（1998-9：404）。

朱熹在南宋般、各自成為一個時代学術思想之中心[72]。

後者では、同じ段落が次のように改められている。

他這『朱子晩年定論』的裒集、亦可謂始終未能擺脱朱熹的牢籠。同時羅欽順即已指出其極易覚察的幾条錯誤。稍後陳建特著『学蔀通辨』、詳加指摘、幾于体無完膚。従来以一代大儒、一代宗師来写一本書、総没有像此書般的粗疎的。這里自応有一套学問思辨工夫、却非守仁所提致良知、知行合一、立誠、事上磨練這幾句話所能包括。守仁之学究近陸九淵。朱熹説：「九淵之学有首無尾。」正指這等処。所以後来王学流弊、也正在有首無尾、空疎不読書[73]。

以上の対照から、いくつかの相違点が指摘できる。第一に、前者が王陽明と陸九淵の違いを強調し、王学の包容性を重視し、その学術の規模が陸氏よりも大きいと考えているのに対し、後者では王陽明と陸九淵の共通点を強調するとともに、王学の弊害として「空疎で本を読まない」という欠点に陥っていると指摘している。第二に、前者では陽明学に対していくらか批判は含むが、基調は肯定的なのに対し、後者では反対者の意見を採用し、王学に対する批判と疑問が強くなっている。第三に、前者では陽明学と朱子学が同等で、「それぞれが時代の学問思想の中心」だったとするが、後者ではこうした中国思想史における王陽明の位置づけについて一言も触れていない。第四に、前者は朱熹の影響を取り上げているが、主に陽明学の独自性とその貢献に基づいて王陽明を評価しているのに対し、後者は基本的に朱熹の視点から王陽明を評価しており、そのため総合的な評価は否定的になっている。

後者は明らかに1960年代中葉以降の銭穆の思想を反映している。つまり、1950年代における銭穆の陽明学理解は、以下のように要約できるだろう。国共内戦による国民党政権の崩壊と共産党による新政権樹立という歴史的変革を経た後、銭穆は政治的には蔣介石政権に賛同、また宋明理学にも更なる共感を抱くようになった。この時期に出版された一般向け著作は、陽明学に対する疑問や批判をあまり含んでいない。ただし、徐復観との書簡のやりとりを通じて、銭穆が陽明学と朱子学の間で葛藤していたことが窺えるのである。

四　晩年期：陽明学の否定へ

1966年、中国大陸で前代未聞の文化大革命が勃発し、伝統文化は廃棄物とみなされ、壊滅的な打撃を受けた。銭穆にとって共産党のこの動きは文化的大惨事に等しかった。翌年、古稀を過ぎていた銭穆は台湾に移住し、蔣介石当局から厚遇された。

1960年半ば頃から、銭穆は朱子学の研究に没頭していった。研究を重ねるごとに、朱熹の学問や思想

72）銭穆（1955：210-211）。

73）銭穆（1998-9：269）。

にますます感銘を受け、敬服するばかりであった[74]。そして、1971年に百二十万字にも及ぶ『朱子新学案』が出版された。その後、南宋末から清朝中期にかけての朱子学派に関する研究に集中していく。

1960年代には陽明学についての議論が急激に減少し、まさに「王学の空白期」といえる。1970年代以降の論文では陽明学に触れるものの、その評価は主に否定的である。大まかにいえば、1960年代以降、銭氏の思考は「朱熹中心観」が主導し、学術的な探究は必然的に朱熹の影響を強く受け、学問の議論も朱熹を基準とするものが増えていくのである。

1　反対派を利用して王学を批判する

まず、『中国学術思想史論叢（七）』に収録された1970年代のいくつかの論考をもとに、陽明学に関する晩年の言説を分析してみたい。「羅整庵学述」、「顧涇陽高景逸学述」、「読陳建学蔀通辨」の三つの論文は、それぞれ1971年、1975年、1978年に発表され、いずれも「朱子学派の考察」というグループに分類できる。

羅欽順（1465～1547）は、字は允升、号は整庵、江西省泰和の出身である。明代中期においては王陽明と並ぶほどの碩学であった。銭穆は「羅整庵学述」の中で、羅氏が心性を見分けることに長けており、程頤や朱熹にはわずかな異論があるものの、陸九淵や王陽明には厳しく批判的な立場を取っていたと指摘している。また、羅氏によれば、陸・王は『孟子』や『大学』を解釈する際、その本来の意味をとり違え、むしろ禅宗からの影響を受けていたという[75]。要するに、銭穆は基本的に羅欽順を明代における程朱理学の重要な人物と見なし、とりわけ羅氏の王学に対する批判に注目しているのである。

明末の東林学派は勢力を誇り、顧憲成と高攀龍がその指導者として挙げられる。顧憲成（1550～1612）、字は叔時、号は涇陽という。高攀龍（1562～1626）、字は存之、世では景逸先生と称されていた。両者とも無錫の出身であり、つまり銭穆の故郷の先輩でもある。「顧涇陽高景逸学述」という論文では、晩明の学界が陽明学から朱子学へと変化する傾向があり、その先駆が東林学派であると論じている。顧氏は朱熹を尊重し、学術思想史におけるその貢献を大いに称賛したが、この点は銭穆によって受け継がれ、さらに発展させられている[76]。

また、顧氏の学問は陽明学から入門したため、王陽明をも高く評価していたが、その「無善無悪心之体」という教えは厳しく批判し、高攀龍もこれを非難した。この点については、銭穆も賛成している[77]。特に注目すべきは、高氏の「無善無悪」批判を論じる際に、『明儒学案』が関わってくることである。「無善無悪」をめぐって、黄宗羲は王龍谿を批判したが、一方で王陽明を批判しなかった。そのため、銭穆は黄氏に不満を抱いているのである[78]。この論考から明らかなように、銭穆は1940年代から1950年代にかけては主に王陽明の門弟、特に王龍谿などに批判的であったが、この時期に至って直接に陽明自身を非

74）たとえば、銭穆が1964年10月24日に楊聯陞に宛てた書簡に次のような言葉がある。「窃謂能兼綰道学、儒林于一身而各達其至高標准者、惟朱子一人為然。此後欲求発揚中国新儒学、亦惟有循此一途。」銭穆（1998-53：221）。

75）銭穆（1998-21：62、67、75）。

76）銭穆（1998-21：319-320）。

77）銭穆（1998-21：326-327）。

78）銭穆（1998-21：340-341）。

難し、陽明学に対する警戒感を深めていた。

陳建（1497～1567）、字は廷肇、号は清瀾、代表作は『学蔀通辨』である。この書は朱熹と陸象山の異同を詳しく検討し、王陽明の『朱子晩年定論』に反論することを目指している。錢穆によれば、『学蔀通辨』の前編は朱熹と陸象山の晩年の違いを強調し、後編は陸氏の学説の「禅性」を指摘している。また、この書物が登場した後、朱子の晩年の学説と陸象山の見解が類似するとしたそれまでの論点は成り立たないとする。さらに、この著作の主旨である「陽明の陽儒陰仏」に大いに賛同している[79]。

羅整庵、陳建らはいずれも陽明学に批判的な立場を取り、時には厳しく非難している。したがって、これらの三つの論文は反対派の立場から、陽明学を批判するために著されたと見なすことができるだろう。

2　黄宗羲への批判を通して王学を否定する

『中国学術思想史論叢（七）』に収録された「読劉蕺山集」という論考は、発表年が不明だが、文中の観点から判断すると、おおむね1970年代の作品に属すると考えられる。この論考は、晩年の錢穆の陽明学理解をより詳細に明らかにしている。

> 余少年読黄梨洲『明儒学案』、愛其網羅詳備、条理明晰、認為有明一代之学術史、無過此矣。中年以後、頗亦渉猟各家原集、乃時憾黄氏取舎之未当、併于毎一家之学術淵源、及其独特精神所在、指点未臻確切。乃復時参以門戸之見、意気之争。劉蕺山乃梨洲親所受業、亦不免此病[80]。

錢穆の学業を振り返ると、黄宗羲の『明儒学案』と王陽明の『伝習録』は、その思想の成長において決定的な影響を与えたと言っても過言ではない。しかし、知見が深まるにつれ、陽明学のさまざまな欠点が明らかになってくる。これはかつて陽明学を理想としていた錢穆にとって、心理的に大きな転換であった。そもそも王陽明は理学の内部において朱子学への批判者で対極的な思想家であった。朱子学に親しんだ錢穆は、知らず知らずのうちに朱熹の基準で王陽明を判断し、結局、陽明学は抜け穴だらけだと感じるようになった。その意味では、初期の陽明学への憧れと晩年の朱子学への憧れは、いずれもその学問に大きな制約を課す認識上の障害になったのではないだろうか。

「読劉蕺山集」という論考はその典型的な例である。たとえば、この論考では、劉宗周（蕺山）の「答史子復三」の一句を引用している。

> 僕不敏、不足以窺王門宗旨、抑聊以存所疑、窃附于整庵・東橋二君子之後。

これについて錢穆は次のように解釈している。

> 則蕺山于王学、自謂多所疑、而窃自附于羅整庵之与顧東橋。凡其自立説、皆当于此窺之、自不当目

79）錢穆（1998-21：276、280、298）。

80）錢穆（1998-21：351）。

　　蕺山為王門之嫡系伝宗也[81]。

　実際、劉宗周の王学に対する懐疑と批判は、一般的な思想の進展に沿ったものである。学脈を受け継ぐといっても、弟子が師の真似をするわけではない。学問の伝承には継承と変化があり、人格や時代によって、師門の教義に対して批判的に継承するのは当然である。少なくとも、「僕不敏」以下の一言だけでは銭穆のような結論を導き出すことはできない。
　また、劉宗周の「重刻伝習録序」から次の一節を引用している。

　　孔・孟既没、心学不伝、雖経程・朱諸大儒講明救正、而其後束于訓詁、転入支離、往往析心与理而二之。先生特本程・朱之説而求之、以直接孔・孟之伝曰「致良知」。先生所病于宋人者、以其求理于心之外也。故先生一則曰「天理」、再則曰「存天理而遏人欲」。先生蓋曰、吾学以存天理而遏人欲云爾。故又曰「良知即天理」。先生之言、固孔・孟之言、程・朱之言也。而一時株守旧聞者、驟诋之曰禅。後人因其禅也而禅之、転借先生立幟、分門別戸、反成燕・越。

　これに対して銭穆は次のように解釈している。

　　是当時禅学、乃承王学而起。不入虎穴、不得虎子。蕺山之講陽明、乃求由此返之程・朱、返之孔・孟、而即以辟禅。而又直称孔・孟・程・朱曰「心学」、尤為特出之見。王門後人、必欲標揭其師之学曰「心学」、以樹異于程・朱、乃以独立于儒学伝統之外、而反以通于禅。蕺山意見、大率如是[82]。

　劉宗周の「重刻伝習録序」の主旨は王陽明が程朱の教えに基づき、孔孟の伝統を継承し、良知学を提唱したことを称えるものであった。ところが、銭穆の解釈では、むしろ王陽明を批判する意味合いが現れている。劉宗周は王陽明が孔孟や程朱を継承したために王学を「心学」と称したのだが、王門後学は逆に「心学」の語を用いることによって禅学に近づいてしまった、というのである。
　加えて、黄宗羲が師の劉宗周の教えを守ったことに対しても不満を示している。

　　梨洲之『明儒学案』、真所謂株株惟一先生之言是守矣[83]。

　このような議論は学術的なレベルを超えて、感情的な非難になっているように思われる。
　そればかりか、次のような批判もある。

　　然其持論、殊不免仍陥于程朱・陸王宗派門戸之争中而未能自抜、因奉陽明為有明一代理学之中心；

81）銭穆（1998-21：355）。
82）銭穆（1998-21：356）。
83）銭穆（1998-21：357）。

而尊蕺山、則若為王学之殿軍矣[84]。

黄宗羲は程朱と陸王の派閥争いに巻き込まれ、結局、王学側に味方したにすぎないというのである。もちろん、錢穆は時折、『明儒学案』が明代の学術史に関して王陽明を中心に考察していることは妥当だと認めている[85]。しかし、全体として、この時期の錢穆は陽明学に対して基本的に批判的であり、時に過激な否定の立場をとっていた。

そして、黄宗羲に対して以下のように結論づけている。

故其晩年所為『学案』、亦僅可為治明代儒学者一必要之参考書而止。其于明代儒学之始終流変、乃及各家学術之大趨向、及其于儒学大統中軽重得失離合是非之所在、則頗少窺入、而仍以宣揚王学為其書之最大宗旨。則恐決不可謂其合于師門蕺山之精神也[86]。

これは、錢穆による黄宗羲の『明儒学案』への最終的な判断といえよう。『明儒学案』は王学を宣揚する目的で書かれたものであって劉宗周の精神とは合致せず、したがってまた客観的な学術史とはいえないというのである。黄氏の学問に対する厳しい批判と深い否定が表れており、同時に陽明学に対する不満も吐露されているのである。

3 「陽明学圏」の解体と「王学非理学」論の提案

上述からわかるように、1970年代以降、陽明学に対する錢穆の姿勢は著しく変化した。ここではさらに二つの側面から論じておきたい。

一つ目は「陽明学圏」の解体である[87]。

第一章で述べた通り、錢穆が陽明学から朱子学へ移行する過程で、王陽明、黄宗羲、章学誠から成るとする「陽明学圏」は次第に瓦解していった。

まず、1950年代、錢穆は『文史通義』が五経の論述に『春秋』が欠けていることに気づき、それを理由に章学誠に対して痛烈な批判を行った[88]。それにもかかわらず、1960年代初頭まで、依然として黄宗羲と章学誠を浙東史学の代表と見なしていた。ただし、1966年、弟子の余英時に宛てた書簡の中で、その視点は急変した[89]。錢氏の意見では、章氏の浙東と浙西の分け方はかなり「牽強」であり、「浙東史学」は黄宗羲と全祖望にまで遡ることがはできるが、南宋の呂祖謙と葉適までは遡れないと主張した。さらに、錢穆は王陽明が歴史学を重視していないと主張し、そこから王氏と章学誠の関連性を否定するよう

84）錢穆（1998-21：364）。

85）たとえば、1970年代初頭に「中国史学名著」の講義を行った際、依然としてこのような観点を取っていた。錢穆（1998-33：358）。

86）錢穆（1998-21：365）。

87）この点については、饒佳栄（2023c：54-66）では詳しい。

88）錢穆（1998-8：299-304）。

89）錢穆が1966年11月17日余英時に宛てた書簡による。錢穆（1998-53：447-449）。

になった。そして、1970年代に入ると、章学誠の『文史通義』と黄宗羲・全祖望との関係を明確に否定し[90]、これにより章氏と浙東学派とのつながりを完全に断ち切ることになる。

二つ目は、「王学非理学」論の提案である[91]。

1974年９月から1975年夏にかけて、錢穆は台北の素書楼で中国文化学院の大学院生に向けて「経学大要」という講義を行った。この講義は、顧炎武の「経学即理学」という主張から驚くべき論点を展開する。

まず、錢穆は経学の立場に基づき、王陽明を激しく批判した。たとえば、次のように述べている。

> 王陽明講「致良知」、『大学』只講「致知」、没有講「致良知」。『大学』説：「致知在格物。」我們怎麽知道？要格了物才知道。王陽明講「格物」（中略）他這様講、一部『大学』反過来講了、変成「格物在致知」了、両句話講法不同的。講経学要照字句上講、不能不管字句来自由発揮[92]。

経学の立場から陽明学を見ると、文脈を無視して「自由発揮」した王陽明は確かに「間違った」かもしれない。しかしながら、皮肉なことに、若年期の態度はこれとまったく逆だったのである。その著『王守仁』ではこう始めている。

> 講理学最忌的是搬弄幾個性理上的字面、作訓詁条理的工夫、却全不得其人精神之所在。次之則争道統、立門戸。（中略）読者須脱棄訓詁和条理的眼光、直透大義、反向自心、則自無不豁然解悟[93]。

ここで強調されているのは「訓詁」を破棄して「大義」「精神」をじかに把握することであった。つまり、晩年の錢穆は陽明学を非難し、自身の早期の立場を否定しているのである。

次に、錢穆によれば、理学は経学を基盤と前提としており、明朝には経学が存在しなかったため、明朝には理学が存在しなかったという。この論理に従えば、王学を理学とは呼べないと主張している[94]。王学は理学としての資格がないというのである。この段階になると、錢穆にとって、王学は無価値な存在というわけではないが、若い頃に陽明学を理想としていたのと比較すれば、まさに雲泥の差がある。

王学に対する錢穆のこの態度は、黄宗羲の「明儒学案発凡」の一節とは対照的である。

> 嘗謂有明文章事功、皆不及前代、独于理学、前代之所不及也、牛毛繭絲、無不辨析、真能発先儒之所未発。程・朱之辟釈氏、其説雖繁、総是只在跡上；其彌近理而乱真者、終是指他不出。明儒于毫厘之際、使無遁影[95]。

90）錢穆（1998-33：382）。

91）この点については、饒佳栄（2023b：38-53）では詳しい。

92）錢穆（1998-52：829）。

93）錢穆（1998-10：序３）。

94）錢穆（1998-52：850-851）。

95）黄宗羲（著）沈芝盈（点校）（1985：17）。

上記の黄宗羲への非難と合わせて考えると、錢穆自身の学的立場はほぼ完全に陽明学に別れを告げたといえる。

本章の論述は、次のようにまとめられる。1970年代以降、錢穆の陽明学に関する言説は、ほぼ朱子学の立場に基づき、陽明学に対してさまざまな面で厳しい批判を行っている。すなわち、反対派の意見を利用して王学を批判したり、黄宗羲を非難して王学を否定したりした。同時に、章学誠の「浙東学術」の系譜を解体させ、王陽明、黄宗羲、章学誠との関連性を断ち切った。さらに、驚くべき「王学非理学」論を提唱している。理学の立場から考えると、これは王陽明の思想を根底から否定するものといえるかもしれない。

五　陽明学の価値と意義

上述したとおり、錢穆は終生にわたり宋明理学を尊重していたが、その思想はあたかもシーソーのごとく、朱子と陽明が対極に位置し、一方が上がると他方は下がるという状態だったように思われる。清末民国時代の知識人による礼賛や陽明自身の魅力、また黄宗羲の影響もあり、若い頃の錢穆は王陽明をこの上なく崇拝していた。当時は陽明学の立場から朱熹を論評し、朱子学には多くの欠点があると考えていた。しかし、日中戦争勃発後、錢穆は次第に朱子学に接近し、さらに晩年には朱子学の研究に全力を注ぎ、そのため朱子学の視点から陽明を評価し、疑問や批判もますます激しくなり、結果として陽明学の地位を引き下げることになった。

錢穆のこの思想的転換には多くの興味深い要素が含まれており、探究する価値がある。紙幅の制限により、ここではいくつかの点について述べておきたい。

第一に、錢穆の陽明学は純粋な学術研究ではなく、むしろその人生の追求と感情にもとづいた儒学的実践である。その陽明学に対する姿勢は、時代の思潮、社会環境、そして個人的な精神状態に大きく影響されていた。第二に、陽明学であろうと朱子学であろうと、錢穆が設定した最高基準は変わっていない。たとえば、青年期には陽明学を「実学」と考え、晩年期には朱子学を「実学」と主張するようになり、その間も「実学」の理念を一貫して保持していた。第三に、錢穆の思考は伝統的な「朱王（または朱陸）の論争」の枠組みから抜け出すことができず、「唯一の真理観」[96] にとどまった。そして、錢氏の陽明学と学術思想史研究は密接に関連しており、陽明学の理解がその学術思想史の評価に影響していた。とりわけ章学誠の「浙東学術」論の崩壊と陽明学の批判および否定は、基本的に同時に行われていた。大まかに言えば、陽明学（理学）評価と学術思想理解の相互影響が、その中国思想史研究の重要な特徴になっていたのである。

ただし、錢穆の人生において陽明学は無視できない意義を持っていたと考えられる。ここでは三つの側面から論じてみたい。

一つ目は錢穆と胡適の関係である。新文化運動の時期、錢穆は先秦諸子の考証的研究によって名声を得たが、「私は元々、宋明理学者の言葉が好きであり、清代の乾嘉時期における儒者の学問は好きではな

96）ここでは、陳嘉映の『走出唯一真理観』（上海：上海文芸出版社、2020年）という書名を借用している。

い」と明言していた[97]。一方、胡適は章太炎らの影響を受け、「礼教殺人」や「理学殺人」を強く主張し、宋明理学を激しく批判していた。また、胡適によれば、銭穆は生涯「理学的気風」から抜け出せなかったという[98]。理学に対するこうした態度の違いは、胡適と銭穆の思想的分岐の主要な原因であり、おそらく銭穆が学界の主流に加わることを妨げた要因の一つであったろう。銭穆と胡適の関係について、学界ではいくつかの研究が行われているが[99]、理学の視点からの探究はまだ不足しており、それについて一層の考察が必要と考える。

二つ目は銭穆と現代新儒家[100]との関係である。銭穆が「現代新儒家」の一員であるかどうかについて、学界には様々な意見がある[101]。ここで指摘したいのは、晩年の銭穆と現代新儒家の陽明学に対する姿勢の大きな違いである。銭氏の王学への厳しい批判に対して、現代新儒家は基本的に王陽明の貢献を称揚していた。このことが、銭氏と現代新儒家の間に存在する隔たりの原因なのかどうか、さらなる探求が必要である。

三つ目は、精神状態に対する影響がある。銭穆にとって、理学は単純な学問だけでなく、人生の実践でもあった。ここでは特に1950年代初頭の銭穆の陽明学理解を着目したい。この時期、銭穆は困難に立ち向かう奮闘の意欲に満ちていたようである。1949年に香港で新亜書院を設立して以降、銭穆はみずから作詞した校歌で「千斤担子両肩挑（両肩に重い荷物を背負い）」という歌詞のとおり、その決意を曲げず、精進し続けてきた。この点で、王陽明の実践至上の精神と道徳理想主義は、当時の銭穆には計り知れない励みとなったはずである。新亜書院の卒業生であり、銭穆の高弟である余英時は、銭穆が亡くなった後に書かれた追悼の文章に、忘れられないエピソードを記している。それによると、1950年代初頭のある夏休み、銭穆は重度の胃潰瘍を患い、一人で教室の床に横たわりながら、王陽明全集を読みたいと渇望していたという[102]。このエピソードからも、銭穆にとって陽明学の価値と意義がうかがえる。

それゆえ、1953年に出版された『宋明理学概述』には、感動的で心に訴えかける言葉が一節残された。

> 顧余自念、数十年孤陋窮餓、于古今学術略有所窺、其得力最深者莫如宋明儒。雖居郷僻、未嘗敢一日廃学。雖経乱離困厄、未嘗一日頽其志。雖或名利当前、未嘗敢慟其心。雖或毀誉横生、未嘗敢餒其気。雖学不足以自成立、未嘗或忘先儒之矩矱、時切其響慕。雖垂老無以自靖献、未嘗不于国家民族世道人心、自任以匹夫之有其責。雖数十年光陰浪擲、已如白駒之過隙、而幼年童真、猶往来于我心、知天良之未泯。自問薄有一得、莫匪宋明儒之所賜[103]。

97）銭穆（1998-51：159）。

98）銭穆（1998-33：182）。

99）たとえば、王汎森（2006：253-287）、陳勇（2011：65-77）、周質平（2021：7-40）、瞿駿（2021：21-30）。

100）現代新儒家については、吾妻重二（1989：83-103）参照。

101）代表的な意見として、余英時と劉述先の論文を挙げることができる。余英時（1994a：30-90）、劉述先（2003：173-192）参照。

102）余英時（1994b：11）。

103）銭穆（1998-9：序８）。

この序文の執筆時期と当時の銭穆の状況を考慮すると、「宋明儒」という表現は、主に明儒、とりわけ王陽明を指す可能性が高い。ただ、陽明学を高く評価したのは、これがおそらく銭穆の生涯で最後のことであっただろう。

おわりに

本稿はまず、時代の思潮が銭穆の陽明学探求に与えた指導的な役割を指摘した。清末から民国初期にかけて、知識人たちは近代中国の危機に対応して晩明時代の歴史を再発見し再解釈していた。この過程で、王陽明や黄宗羲の思想が高く評価され、その思想的潮流が銭穆に深い影響を及ぼし、陽明学が社会改革の理念として捉えられるようになった。

また『王守仁』、『国学概論』、『中国近三百年学術史』などの著作を検討することで、銭穆の青年期の思想的枠組みを明らかにした。すなわち、宋学（宋明理学）と漢学の間では、漢学は宋学に及ばない。理学の内部では、朱子学は陽明学に劣り、陽明学が理学の最高峰とされた。同時に、その陽明学理解は章学誠の「浙東学術」論に大きな影響を受け、王陽明、黄宗羲、章学誠を結びつけていた。ある意味で、「浙東学術」論は銭氏の陽明思想の受容を学問的に支える一因となったのである。しかし、その後、銭穆が朱子学に転向するにつれて、王陽明、黄宗羲と章学誠の「陽明学圏」は次第に瓦解していく。

さらに、銭穆が陽明学から朱子学に向かう曲折な過程と内面の葛藤を考察した。若い頃の礼賛から疑念へ、朱子学と陽明学の間での徘徊、そして最終的に陽明学を捨て朱子学に傾倒するまでの道のりを紐解いた。

本稿では銭穆における陽明学の価値と意義についても論じた。ただし、銭穆と胡適、現代新儒家との関係については、今後の課題として一層の考察が必要と思われる。

参考文献リスト

〔資料〕

本稿に引用する銭穆の文章は、特に断らない限り、すべて『錢賓四先生全集』（台北：聯経出版事業公司、1998年）による。「銭穆（1998-1）」→『錢賓四先生全集』第１冊

銭穆（1998-1）『国学概論』（初版、上海：商務印書館、1931年）
銭穆（1998-8）『両漢経学今古文平議』（初版、香港：新亜研究所、1958年）
銭穆（1998-9）『宋明理学概述』（初版、台北：中華文化出版事業委員会、1953年）
銭穆（1998-10）『陽明学述要』（初版は『王守仁』と題し、上海：商務印書館、1930年）
銭穆（1998-16）『中国近三百年学術史（一）』（初版、上海：商務印書館、1937年）
銭穆（1998-18）『中国学術思想史論叢（二）』（初版、台北：東大図書公司、1977年）
銭穆（1998-21）『中国学術思想史論叢（七）』（初版、台北：東大図書公司、1979年）
銭穆（1998-23）『中国学術思想史論叢（十）』（初版、『錢賓四先生全集』版）
銭穆（1998-33）『中国史学名著』（初版、台北：三民書局、1973年）
銭穆（1998-39）『湖上閑思録』（初版、香港：人生出版社、1960年）

錢穆（1998-51）『八十憶双親師友雑憶合刊』（初版、台北：東大図書公司、1983年）
錢穆（1998-52）『講堂遺録』（初版、『錢賓四先生全集』版）
錢穆（1998-53）『素書楼餘渾』（初版、『錢賓四先生全集』版）
錢穆（1955）『宋明理学概述』台北：中華文化出版事業委員会
錢婉約（整理）（2020）『錢穆致徐復観信札』北京：中華書局

〔研究文献〕
〈中文〉
陳立勝（2018）「陽明学登場的幾個歴史時刻——当“王陽明”遭遇“現代性”」『社会科学戦線』7：44-57
陳勇（2011）「試論錢穆与胡適的交誼及其学術論争」『史学史研究』3
——（2015）「錢穆的朱子学研究」『宜賓学院学報』5
杜正勝（1995）「錢賓四与二十世紀中国古代史学」『当代』111
傅傑（2016）「錢穆与甲骨文及考古学」傅氏著『文史芻論』北京：海豚出版社
郭斉勇・汪学群（1995）『錢穆評伝』南昌：百花洲文芸出版社
黄克武（2004）「梁啓超与儒家伝統：以清末王学為中心之考察」『歴史教学』3
黄宗羲（著）沈芝盈（点校）（1985）『明儒学案』（上冊）北京：中華書局
頼柯助（2021）「錢穆先生的陽明“良知学”刍議」李帆・黄兆強・区志堅主編『重訪錢穆』（上冊）台北：秀威資訊
楽愛国（2013）「民国時期錢穆的朱子学研究及其創新——従朱子心学入手」『南京社会科学』1
李帆・黄兆強・区志堅（主編）（2021）『重訪錢穆』（上冊）台北：秀威資訊
梁啓超（著）夏晩虹（導読）（2001）『論中国学術思想変遷之大勢』上海：上海古籍出版社
劉述先（2003）「対於当代新儒家的超越内省：上篇：理学、経学与史学的融通——由方法学的観点論“錢穆与新儒家”」香港中文大学新亜書院新亜学術期刊編輯委員会（編）『錢賓四先生百齢紀念会学術論文集』香港：香港中文大学新亜書院
盧傑雄（2021）「錢穆先生対朱子倫理思想的重構」李帆・黄兆強・区志堅主編『重訪錢穆』（上冊）台北：秀威資訊
錢婉約（2022）「錢穆賓四先生研究概述」『関西大学中国文学会紀要』43
秦燕春（2008）『清末民初的晩明想像』北京：北京大学出版社
瞿駿（2021）「“斉王”為何終不前——錢穆与胡適的初見」『読書』3
任剣濤（2019）「“良知的迷惘”——徐復観、張君劢与錢穆的政治儒学之争」『清華社会科学』2
石力波（2014）「従“高明”到“粗疎”——錢穆的陽明学研究述評」『大慶師範学院学報』1
王汎森（2001）「清末的歴史記憶与国家建構——以章太炎為例」王氏著『中国近代思想与学術的系譜』石家荘：河北教育出版社
——（2006）「錢穆与民国学風」『燕京学報』新21
——（2020）「“客観理智”与“主観意志”——後五四思潮中的両種趨向」王氏著『啓蒙是連続的嗎？』香港：香港城市大学出版社
王風（2015）「章太炎言語文字論説体系中的歴史民族」王氏著『世運推移与文章興替——中国近代文学論集』北京：北京大学出版社
汪学群（1998）『錢穆学術思想評伝』北京：北京図書館出版社
魏義霞（2021）「論中国近代的陽明学研究」郭斉勇（主編）『陽明学研究』（第五輯）北京：人民出版社
呉啓超（2021）「史家的哲学工夫——錢穆対朱子哲学研究之啓迪」李帆・黄兆強・区志堅（主編）『重訪錢穆』（上冊）台北：秀威資訊
呉義雄（2004）「王学与梁啓超新民学説的演変」『中山大学学報』1
呉展良（2000）「学問之入与出：錢賓四先生与理学」『台大歴史学報』26
呉震（2018）「従東亜視域看陽明学的多種形態——以“両種陽明学”的問題為核心」郭斉勇（主編）『陽明学研究』（第三輯）北京：人民出版社
許裕農（2013）「錢穆先生理学思想之転変——由陽明転向朱子」台湾中興大学中国文学系修士論文

余英時（1991）『猶記風吹水上鱗：錢穆与現代中国学術』台北：三民書局
――（1994）『錢穆与中国文化』上海：上海遠東出版社
――（1994a）「錢穆与新儒家」余氏著『錢穆与中国文化』上海：上海遠東出版社
――（1994b）「猶記風吹水上鱗――敬悼錢賓四師」余氏著『錢穆与中国文化』上海：上海遠東出版社
張灝（著）崔志海・葛夫平（訳）（1995）『梁啓超与中国思想的過渡（1890～1907）』南京：江蘇人民出版社
周質平（2021）「“打鬼”与“招魂”：胡適、錢穆的共識与分歧」李帆・黄兆強・区志堅（主編）『重訪錢穆』（上冊）
朱湘鈺（2006）「钱穆先生思想中的阳明图像」『国文学报』39

〈日文〉
吾妻重二（1989）「中国における非マルクス主義哲学――〈新儒家〉をめぐって」『思想』784
荻生茂博（2008）『近代・アジア・陽明学』東京：ぺりかん社
小島毅（2006）『近代日本の陽明学』東京：講談社
古文英（2019）「近現代中国おける陽明学関連研究目録」『東アジアの思想と文化』10
島田虔次（1967）『朱子学と陽明学』岩波書店
饒佳栄（2023）「錢穆の明清学術史研究」関西大学東アジア文化研究科修士論文
饒佳栄（2023a）「『中国近三百年学術史』の一解釈――陽明学の視点から清学史を考察する」（修論第二章）
饒佳栄（2023b）「理学とは何か――「清代理学」論と「明代無理学」論から」（修論第三章）
饒佳栄（2023c）「錢穆の章学誠論」（修論第四章）

〈英文〉
John Israel (1999), *Lianda: A Chinese University in War and Revolution*, Stanford: Stanford University Press